

2022/12/22 10:30

東洋経済オンライン 子どもを本当に幸せにする「親の力」 (親野 智可等 : 教育評論家)

「学校の宿題で苦しむ親子」…その大きすぎる弊害 一律に出される宿題、それ本当に必要ですか？

学校から出される宿題で苦しんでいる親子がたくさんいます。同じ量の宿題でも学力と集中力が高い子は10分で終わりますが、そうでない子は何時間もかかったりします。毎日親に叱られながら大苦勞して宿題をやっている子がたくさんいるのです。それはその子のせいではなく、宿題の質と量が不適切なだけです。長年、小学校の教師をしてきた経験からも、私は過重な宿題は虐待に該当すると思います。

私が話を聞いたSさん親子もその一例です。4年生の長男に宿題をやらせるのが本当に大変で、毎日親子で大ゲンカをしているとのこと。3年生までは宿題が少なかったのでも何とかなっていたのですが、今年の先生は宿題がかなり多いそうです。そして、宿題をやっていない場合は、学校で長々とお説教されたり休み時間にやらされたりするとのこと。子どもも気持ちがすさんできているし、親のほうもイライラしっぱなしだそうです。

このように宿題の過重負担で苦しんでいる親子は世間にたくさんいて、私はこれは大きな問題だと思います。なぜなら、次のような弊害が出てくる可能性があるからです。

1. 子どもの自己肯定感が下がる

「また宿題やってない。ちゃんとやらなきゃダメでしょ」と叱られ続けることで、子どもの自己肯定感が下がります。すると「自分はダメな子だ。どうせ自分はダメだ」という気持ちを持つようになります。それによって、何事においても意欲が低下したり、努力できなくなったりします。子どものときにこうした意識を植え付けてしまうのは、非常に大きな問題です。

2. 親子関係が悪化する

叱られ続けることで、子どもは「お父さん・お母さんは自分のことをダメな子だと思っている。こんなダメな自分はもう大切にしてもらえない」と感じるようになります。これは親の愛情に確信を持っていないということで、いわゆる愛情不足を感じている状態です。これによってますます親に反発したりお試し行動をしたりしますし、いきつくところは親子関係の崩壊ということになる可能性もあります。

3. よけい勉強が嫌いになる

宿題のことで叱られると、勉強に対するネガティブな印象が強化されます。自分に合った内容を自分のペースで学べば、新しいことを知ることができる勉強は誰にとっても楽しいものなのですが、子どものときに「勉強は不愉快。嫌い」と刷り込まれてしまうことで、将来にわたっても勉強から遠ざかってしまうのです。

4. 自分がやりたいことをやる時間がなくなる

「宿題をやらなきゃ」と思いつつも始めないまましていると、ダラダラと過ごす時間が増えます。始めたとしても、宿題が多すぎたり難しすぎたり集中力がなくなったりしていると長い時間がかかります。それによって、子ども自身がやりたいことをやる時間が減ってしまいます。子ども時代には、遊びも含めて自分がやりたいことをたっぷりやる時間が大切です。その中で好きなことを見つけて深掘りしたり、生まれながらの才能を開花させたりできるのです。

また、好きなことをやっているときに「地頭がよくなる・非認知能力が高くなる・やり抜く力がつく」などよいことがたくさん起こり、それが子どもの成長につながります。でも、宿題のことで煩わされることで、そうした貴重な時間がどんどん減ってしまいます。それに、これからの時代に必要なのは一律に与えられた課題をこなす能力ではなく、自ら主体的に課題やテーマを決めて主体的に取り組むマインドと能力のはずです。そうした能力を育てる時間を、宿題が奪っているというのが実態です。

5. ストレスをため込み、暗い気持ちで過ごす時間が長くなる

宿題のことが頭から離れなかったり親から叱られたりすることで、子どもはストレスを抱え込みます。当然、暗い気持ちで過ごす時間が長くなり、精神衛生上よくありません。性格が暗くなる・病気になる・友達や兄弟とのトラブルが増えるなどのリスクもあります。実際、私が知り得た例として、ある小学4年

生の子は宿題のことで胃腸炎になったそうです。この場合、親が先生に事情を話して宿題を本読みだけにしてもらったら治ったとのこと。

では、そもそも宿題は何のために出されるのでしょうか？ それは主に次の2つの目的のためです。

① 学習習慣をつけるため

② 学力を上げるため

でも、実際はこの目的に反した結果になっていることが多いのが実状です。自分に合っていない勉強を押しつけられることは苦痛だけで、学習習慣をつけるどころか勉強への嫌悪感や苦手意識が強まる可能性のほうが大きい。当然、学力を上げることにもつながりません。

では、どうしたらいいのでしょうか？ まず、先生たちにはお願いしたいのは、想像力を働かせてほしいということです。例えば「これだけの宿題をこの子が家庭で本当にやることができるのか？ それにどれだけの時間がかかるのか？ やらせるために親がどれだけ苦労するのか？」などについて真剣に考えてみてほしいのです。

子どもは帰宅してからもやることはたくさんあります。食事・入浴・家族との会話や触れ合い・お手伝い・ペットの世話・習い事・塾……。遊びも含めて自分がやりたいことを自由にやる時間も大切ですし、ぼうっとする時間も必要です。先生がちょっと考えてみれば、「この子にはこれだけの宿題は無理だな」とわかることも多いはず。でも、そのように考えることをしないまま、思考停止状態で一種の惰性のように宿題を出していることが多いのではないのでしょうか？

そもそも、現状では子どもたちの学力差が大きく、授業中にも勉強に集中できない子、集中していたとしても学力の不足で課題がこなせない子もたくさんいます。そのようにプロの先生の指導のもとでも満足いく勉強ができない子たちが、はたして家庭でどれだけの勉強ができるのでしょうか？ それを考えずに家庭に丸投げしてはいけないと思います。

それに、先生たちにとっても宿題は非常に大きな負担のはずです。例えば、次のようなことが必要になるからです。

- 宿題を出す準備
- 提出後の確認と評価
- 未提出の子に事情を聞く
- やってない分をやらせる
- 提出された宿題の丸つけやコメント書きをする

これらのどれにおいても毎回時間がかかります。それに追われて、子どもとの触れ合いや授業準備の時間が取れないというのもよくある話で、まったくの本末転倒です。また、休憩時間が取れなくなったり残業時間が増えたりということもありますし、持ち帰り仕事になっている先生も多いのが実状です。これでは先生の働き方改革にも逆行しています。

また、大きな問題の1つが、宿題が一律に出されることです。冒頭でも書いたように10分でできる子とそうでない子がいるわけで、個人差が大きすぎるのです。では、個別最適化して各自に応じた宿題が出せるかという、それも難しいです。

実は、私も小学校の先生だったとき、子どもの学力に応じて3段階で宿題を出したことがあります。でも、やり始めてすぐにわかったのは、これは無理だということでした。というのも、約40人の子がそれぞれの宿題をちゃんとやってきたか把握するのは、非常に面倒で手間がかかる作業だからです。結局1週間も続きませんでした。

こうしたことから、私は宿題をやめるのがいちばんいいと思います。たとえ出すにしても、量を大幅に減らすべきです。実際に日本のあちこちで、宿題をやめた学校や学級がけっこう出てきています。**学校長の英断で全校一斉に宿題をやめた事例として有名なのは、工藤勇一元校長の東京都千代田区立麴町中学校や、藤田忠久校長の岐阜市立岐阜小学校などです。**また、小学校の夏休みの宿題をナシにした澤田二三夫校長の実践も広く知られています。

最後に、今現在宿題の過重負担で悩んでいる子については、親が救ってあげることが必要です。子どもが宿題に苦しんでいる場合、大人の交渉術で上手に先生に頼んで、救ってあげてください。学級全体に関わる問題だと思われる場合は、学級役員さんから交渉してもらいたいと思います。

まず先生に日頃の感謝の言葉を伝えます。次に「うちの子、先生のことが大好きみたいです」と先生が喜ぶ言葉を、ぜひ入れましょう。それから、子どもが宿題のことで毎日苦しんでいることを伝えて、宿題を減らしてもらいましょう。夏休みや冬休みの宿題も同様です。

最後の最後に先生たちに1つお願いがあります。間もなく冬休みに入りますが、ぜひ宿題をナシにしてください。この年末年始には子どもたちにとって楽しいことがたくさんあります。宿題の憂いから解放されて心から楽しめるようにしてあげてください。

2023/02/23

執筆:教育ジャーナリスト 中曽根陽子 連載記事

小学館を出産で退職後、女性のネットワークを生かした編集企画会社を発足。数少ないお母さん目線に立つ教育ジャーナリストとして紙媒体からWeb連載まで幅広く執筆。海外の教育視察も行い、偏差値主義の教育からクリエイティブな力を育てる探究型の学びへのシフトを提唱。「子育ては人材育成のプロジェクト」であり、そのキーマンであるお母さんが幸せな子育てを探究する学びの場「マザークエスト」も運営している。

「学校の宿題」をめぐる先生と親が抱えるジレンマこなすだけの宿題は必要か 出すのがスタンダード、「理想はなし」の声も

学校から出された宿題を喜んでやるという子どもは、はたしてどのくらいいるだろうか。おそらく親に言われて、しぶしぶ宿題をやる子、なかなかやらずに親子げんかになるという家庭も多いはず。そもそも宿題を出す意味や目的は何なのか。「理想は宿題なし」という先生の声もある中で、「宿題を出してほしい」という保護者の声も根強くある。こうした学校の宿題をめぐる事情について、教育ジャーナリストの中曽根陽子氏が取材した。

宿題が原因で親子げんかになってしまう…

今回のテーマは宿題です。この記事を書こうと思ったきっかけは、ある小学1年生の保護者の方の話を知ったことからでした。そのお母さんは、漢字の書き取りがあまり好きではなく、入学当初、家庭で宿題をさせるのも一苦勞だったそうです。なぜ嫌なのかを聞いたところ、「きれいに書けていないと昼休みに書き直しをしなくてはならず、お友達と遊べないから」と。

お母さんは、子どもの気持ちに共感しつつ、それでも宿題はさせなくてはならないため「その子の夢である飼育員さんになるためには、字をきれいに書けるとどんないいことがあるか」を一緒に考え、「看板の文字がきれいに書けていないとお客さんが読めない」と子どもが気づいて、書き取りの宿題もするようになってホッとしたと話してくれました。

宿題をする意味から考えさせるこのお母さんのアプローチはすばらしいなと感心していたのですが、2学期になり事情が変わっていました。

毎日同じように出される書き取りや計算の宿題が、家庭の中で結構なストレスの種になっていたのです。そこで、お母さんが先生に相談したところ、「そんなものですよ、宿題って」という回答だったそうです。

でも本来は学ぶって楽しいことのはず。「このままでは子どもが勉強は楽しくないものだと思う。それでいいのか。宿題の目的は何なのか」を考えて、先生に相談。漢字を覚えて書けるようになるのが目的なら、やり方は工夫させてもらいたいとお願いして、子どもと相談しながらやり繰り返していると話してくれました。宿題は、子どもにとって楽しくないものになっていてやりたくない。でもやらなければならないものだから、親もどうにかしてやらせようとする。

また、「宿題をするかどうかは子どもの問題だ」と割り切ったとしても、やらないまま行かせたら親の責任になってしまいかねない。やらなくてはならないことをやらないというのもよくないから、子どもと話し合いをしたり、ルールを考えたり、宿題が原因で親子げんかになってしまう。こんな光景は、日本全国の家庭で繰り返されていることでしょう。

こなすだけになっている宿題は、本当に必要なのか

その試行錯誤にも意味がなくはないけれど、「主体的・対話的・深い学び」が重視され新しい学力が求められる中で、一律に出される宿題は効果があるのだろうか、そもそも宿題を出す意味や目的は何なのか考えてみようと思い、まず宿題の実態を取材することにしました。

まず、小学校の先生に話を聞きました。驚いたことに、取材をした先生は口をそろえて「理想は、宿題なしだ」と言います。本来家庭学習は、自分が学びたいことや、授業を受けて興味を持ったことをさらに深めるためにするものだと思いますが、毎日宿題は出しているのだそう。目的は「学習の定着を図るため」がいちばん多く、定番は書き取り・計算ドリル・音読。大体15分くらいで終わるものを出していると言いますが、かかる時間は子どもによって差があるかもしれません。

中には、自学という宿題を出している先生もいました。これは、自分でやることを決めて何かしらに取り組みノートにまとめるというものです。子どもたちは、いろんなテーマに取り組んだという先生がいる一方で、多くは算数や国語が多くなるという声もありました。

面白いことに、話を聞いた先生は皆さん子育て中の親で、「学校の様子がわかるから子どもの宿題を見るのは楽しみだ」という声もあった一方で、「一親としては、こなすだけになっている宿題が本当に必要かは正直疑問だ」という人が大半でした。

また、ある先生は、自分の子どもには「宿題は『約束を守る練習』『締め切りを守る練習』『信頼を積み重ねる練習』だ」と伝えていたと話してくれました。確かに、そういう意味もあるのでしょうか。けれど、本来「学び」ってわからないことをわかりたいという欲求から出てくるものはず。できれば、家庭学習の時間が、子どもが「やりたい!」と思って勉強をする時間になってほしいですね。

宿題の効果については、さまざまな研究があり、毎日のように出る宿題をやることにより、学習習慣の定着が図れるというメリットがある一方で、宿題の量と学力には、相関関係がないという調査結果もあります。

学校の授業で学んだことを家庭学習で定着を図り、その結果を分析して授業に生かすというループが回って初めて効果があるのですが、先生にとっても毎日の宿題チェックはかなりの負担になっているようです。皆さん、朝や昼休みの時間を削ってこなしているのが実態。朝から晩まで、本当に休憩する間もなく仕事をされている先生の働き方改革という意味でも、宿題が再考される時期にきているのかもしれない。

でも、「宿題を出してほしい」という保護者もいて、先生としてはそういう声は無視できない。「宿題を出さないと、学力の定着が図れない子どももいる」「どんな宿題を出すかは個人の裁量だけれど、学年である程度内容や量をそろえる必要がある」など、さまざまなジレンマを抱えながら、「宿題は出すもの」というのが今の日本の公立小学校のスタンダードになっているようです。

一斉一律に出される宿題について問い直すことが必要では？

では中学校ではどうなっているのか、ある公立中学校の教頭先生に話を聞きました。「新学習指導要領で評価の観点が変わり『学びに向かう姿勢』『主体性』『人間性』を見ていかななくてはならないが、現状は、宿題や提出物など従来の評価の観点から脱しきれていない」と言います。

中学校は高校受験にその評価が使われるので、ペーパーテストの見える学力による評価が重視される傾向にあります。また、全国学力テストの結果を重視する自治体もあり、それが教師の足かせになり、本来行われるべき、教科書で学んだことをどう地域の課題解決につなげていくのかという探究学習がなかなか進まないのが実態のようです。

そんな中で、その教頭先生は、「目指すべきは、子どもたちが自学できるように、学び方を学ぶ教育を行っていくこと。そのために必要なのは宿題ではなく、課題を出すことだ」と言い、そんな授業を工夫されているそうです。まさに、学校で学び方を学ばば、社会に出てからも学び続けることができます。本来、知らなかったことを知ることは人の喜びであり、学校に上がる前の子どもたちは「知りたい!」という意欲と好奇心の塊です。でも、真新しいランドセルを背負って、ワクワクしながら学校の門をくぐった子どもたちの多くが、「勉強は楽しくないもの」「しなければならないもの」だと思ってしまうようになり、どんよりとした顔になって卒業していくとしたら、本当にもったいない。

個別最適化とか、ICTの活用とか言われ、教育を変えようという機運もある一方で、現場は従来のスタイルから抜け出せていないという印象を今回の取材でも持ちました。

宿題を廃止した岐阜市立岐阜小学校の記事にもありましたが、日本の教育現場で今さまざまな課題が噴出している中で、「自ら学ぶ力の育成」と「働き方改革」の両面から、子どもたちにとっても、先生にとっても学びを意味のあるものにしていくために、これまでそうだったからではなく、一斉一律に出される今の宿題について問い直すことが必要な時期にきているのかもしれない。

そのためには、先生だけでなく、保護者も、子どもも一緒になって、「宿題」をテーマに対話し、当たり前を見直す機会をつくれませんか。今回の取材を通してそんなことを思いました。このサイトの読者は、先生・保護者などさまざまだと思いますが、この記事が、「宿題」について考えるきっかけになればと思っています。